

村踊りは本当に御冠船踊りなのか

恩納村史編さん委員 板谷 徹

1980(昭和55)年に発行された『沖繩人物名鑑』という不思議な本があります。一頁三段組で各段に「沖繩本島村芝居芸能の伝承者」一人ずつをインタビューによって紹介し、顔写真と経歴を載せる内容です。専門家による調査ではなく、オキナワ・アド・タイムスという出版社の名称からも知られるように一種の名刺広告で、インタビューを受けた人によって貰ったようです。しかしすでに亡くなられた方も多く、ある時代の村踊り(村芝居)についての貴重な証言です。

例えば仲泊の喜納忠雄さんは「舞踊の二才踊り、女踊りは御冠船踊りの流れを汲む芸能」(88頁)といい、瀬良垣の大城堅繁さん、當山房助さん、當山寛正さんは「とりわけ女踊りの『かせかけ』と『コテイ』は、御冠船踊りの流れを汲む舞踊である」(163頁)などといっています。村踊りに近世琉球の王府芸能である御冠船踊りが伝えられているとの証

言は『恩納村誌』にも、「八重瀬は明治二十年頃、与那原殿内が村廻り教授した機会をとらえて伝習した」(527頁)とされる名嘉真、「首里人泉川より明治四十一年頃に教わった」(416頁)とされる

安富祖、「組踊り、舞踊は明治十六年頃、佐渡山家に仮寓していた首里の久志殿内の人の教えであった」(415頁)という恩納などがあります。この御冠船踊りはどのような意味なのでしょう。

中国から冊封使を迎えた冠船の諸宴では、正式には二才踊りが踊られています。そこで女踊りについでみると、冊封使の鑑賞の手引きとして用意された故事集には踊りに使われる琉歌が漢詩に翻訳されて載っていますが、19世紀ではどの冠船でも女踊り



487 『躍番組』表紙



488 同上、本文

喜舎場永珣旧蔵『躍番組』

(本田安次『南島探訪記』明善堂 1962年)